

# Choroyu

下関市立美術館  
Shimonoseki City Art Museum  
No.134 / Spring.2021

## Introduction to The Exhibition

展覧会紹介



下関市立美術館 展覧会スケジュール2021年度

2021年4月～2022年3月

5/15(土)～7/11(日)  
所蔵品展No.155

【特集】アヴァンギャルド大集合

下関ゆかりの画家のひとり桂ゆきを中心に、所蔵品に見るアヴァンギャルドというテーマで、様々なジャンルを織り交ぜて構成します。



桂ゆき《日なた》1938年、  
下関市立美術館蔵

9/11(土)～10/17(日)  
所蔵品展No.156

【特集】生誕110年 香月泰男

山口県三隅町に生まれた香月泰男は2021年で生誕110年を迎えます。香月の表現世界を、下関市立美術館所蔵品にて紹介します。

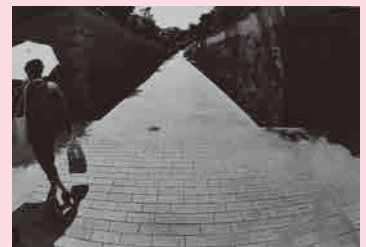


香月泰男《石版画集母子像より》  
1971年、下関市立美術館蔵

2/11(金・祝)～3/27(日)

特別展 野村佐紀子写真展「海」

野村佐紀子(1967～)は下関生まれの写真家です。1991年よりアラーキーこと荒木経性に師事し、人物や男性ヌードなどの静謐な写真で、国内をはじめ、海外でも高く評価されています。故郷下関で開催する初の個展となる本展は、代表作を中心に最新作も加えた構成で、死と隣り合う人の生の儚さとその本質に迫ります。



吉岡一生《きょう・つれづれ》シリーズより  
「テカテカ石畳」1991年、下関市立美術館蔵

7/17(土)～9/5(日)  
特別展 久保修 紙のジャポニスム  
～Kirie 線のかたち～  
山口県美祢市出身で国際的に活躍する切り絵画家・久保修(1951～)。国内各所の移り変わる四季



久保修《ふるさとの春》2018年、美祢市蔵

11/20(土)～2022年1/10(月・祝)

企画展 潮流・下関 ～写真編～

下関在住の写真家たちに焦点を当てた本展は、1980年代にかけて文化財の記録・保存にも貢献した「グループSYS」の活動の軌跡をたどるほか、核となる写真家吉岡一生、清水恒治両名の代表作を紹介します。



野村佐紀子『NUDE / A ROOM / FLOWERS』より  
2012年、作家蔵

## 「潮流・下関2020」展の余白に

清永修全

今日、果たして自分たちが暮らし、働いている街の「文化空間」などというものをことさらに意識することがあるのだろうか。慌ただしい日々の生活に駆り立てられ、それでも精一杯暮らしている。その中で、そうした想像力が働く余地など、もはや多くは残されていないのかもしれない。それでも、時にはふとそこに思いを馳せることがあってもよい。意外に身近なところで、創造の息吹が芽吹き、クリエイティブな感性が息づいていることに気がつく瞬間があるかもしれない。今回で2回目となる下関市立美術館の展覧会「潮流・下関」は、そんな機会を与えてくれた。

この関門の地に居を構え、活動の拠点とし、あるいは個人的な関わりを持ちながら制作を続ける作家たち。そこ



石山義秀作品展示風景 潮流・下関展2020より (以下同)

から集った、世代もジャンルもそれぞれに異なる三名の作家たちの競演。一見、そこにはその緩やかな枠組み以外、取り立てて共通点などないかのよう



石山義秀作品展示風景

うに見える。しかし、展示室を二周もするうちに、何かお互いに相通する通奏低音が作品を通じて静かに鳴り響いていることに気づかされる。石山義秀氏は、フレスコという歴史的な媒体をもとに多くの群像壁画を描いてきた画家である。今回の展覧会では、南仏のエクス・アン・プロヴァンス留学時代を中心に、油彩画やエッチングの作品が多く選び出されていた。それらの作品には、特定の個人の発するオーラや存在感ではなく、むしろ複数の人間の間において初めて生み出されたような、「個」を超えたところで醸し出される独特な佇まいや情緒が、淡く

穏やかな光の中に不思議な調和をもって浮かび上がってくる。薄暗い曇りが低くたれ込めるパリの空ではなく、澄み切った空気とまばゆいばかりの溢れる陽気を求めて南仏を歩き、そこに暮らしたという氏の眼差しが、その微光の中に顕現してくるかのようである。考えてみれば、フレスコによる壁画という表現媒体自体、歴史的にも公共性の高いジャンルであった。実際、氏はこれまでも幾多の公共建築の壁画作品を手がけてきている。人々の生活に寄り添おうとするその共感的な姿勢ゆえの「群像」というテーマ。そこには、「公共性」をめぐる関心が仄々見えてくる。

順路に沿って美術館の階段を上った最初の展示室の前に伊東丈年氏の最初の作品が姿を表す。四柱の白い角



伊東丈年作品展示風景

柱に半ば埋め込まれているかのよう浮き上がる人の手の一部と顔。しかし、どの顔にも苦痛の跡などなく、むしろ静かに瞑想しつつ浸っているよ



伊東丈年作品展示風景

うにも見える。彫刻は、それが置かれる周囲の空間の知覚や捉え方に働きかけ、ひいてはその空間さらにはその「場」との関わり方自体にすら影響を与えるユニークな側面を持った芸術ジャンルである。ここでも展示室前の空間がこれまでに見たことのない新たな表情を獲得し、見る者の身体感覚に働きかけていた。一方で、これまで大分や下関を中心に様々な「公共彫刻」に従事してきた伊東氏である。関門の「都市空間」にその作品を通してどんな関わり方を提起しようとしているのかが気になり始めた。

本来デッサンとは他人に見せるものではなく、それだけにどこか素顔を人前に晒しているような気分になると語るの、中原麻貴氏である。

とりわけその初期のスケッチ作品について尽きない魅力を感じるの、何気ない建物や場所に宿る、かつてそこに住んでいた人々の生活の「痕跡」を表現しようという、そのコンセプトである。それゆえ、それらの作品に人物が登場することは少ない。しかし、そのことでむしろ「痕跡」が一層際立ってくる。その「痕跡」が静かに語り始めるのである。しかし、それは単なるノスタルジーではないし、妙な無常感が醸し出されることもない。その根底にあるのは、庶民の日々の生活に対する氏の尽きない関心と肯定感である。中原氏は、数年前からその制作活動の場を京都から下関に移している。この下関の街には、今描き取っておかなければ永遠に失われてしまうかもしれない愛おしむべき「痕跡」がまだそこかしこに感じられるのだという。

展示室を後にしたときに感じる余韻がある。それは、おそらく自分たちが生活



中原麻貴作品展示風景

している街について内観的に想起することに繋がる契機を孕んでいるに違いない。

その意味で、同展覧会関連企画として12月19日に下関市立美術館講堂で開催された講演会、金田晋氏(東亜大学特任教授・広島大学名誉教授)による「美と公共性―公立美術館を考える―」は、そうした本展覧会の通奏低音と問題提起を別の角度から拾い上げつつ、本館をはじめとする地方公立美術館が今後向かうべき道を指し示そうとするものであった。それは、終わりのなき対話と議論の舞台として、パブリックなエートスと感性を育む場として生まれ変わっていくべきであることを示唆していたように思われた。本展覧会に、本市立美術館がその道を確かに歩み始めていることを改めて実感した次第である。



中原麻貴作品展示風景

開催報告

特別展

高島北海 没後90年記念

# 自然の秘密をさぐる

会期.. 2021. 1. 30(土) ~ 3. 14(日)

2021年が没後90年となる高島北海(1850-1931)を記念した本展は、地質と植物を専門とする技術官僚でもあった異色の画家にちなみ、自然の秘密に迫ろうとした芸術家たちの創作活動を、ジャンルや時代の垣根を超えて紹介するものとなりました。

全体を一章「山・溪流」、二章「植物」、三章「身近な自然・海」の3部構成とし、前半は山岳風景や植物の描写を通して、高島北海という画家の持ち味が前面に出ることを意識しまし



上) 展示のようす。高島北海による長門峡3点が並ぶ一角。中) 二章は植物の緻密な描写から、幅7mを超える綴織壁貼織下絵まで。下) 階段壁面に映し出されたプロジェクターを使ったサイン。山水画の世界へとさそうアニメーション。

た。とりわけ北海が得意とした山水画は、初期の水彩による風景描写から山口県内の景勝地長門峡を描いた晩年の作品群まで、代表作を含むラインナップとしました。植物の章では、日本画のほか版画や学術的な性質を持つ作品まで、幅広くご紹介しました。

実は、今回の総作品数約90点のうち、高島北海による作品は全体の3分の1程度です。北海以外の芸術家は約40人にのぼり、それぞれの多様な自然の描写が展覧会のもう一つの見



長門峡を紹介する動画と、高島北海の人生をすころく形式で迎る、光庭の展示。

作品以外でみどころとなったのは、光庭(館内の吹き抜けのスペース)の展示です。壁面と床面の一部で展開した、すころく形式で高島北海の人生を紹介した展示は、分かりやすく楽しめる好評でした。光庭の中央で上映した長門峡の自然を紹介する動画は、長時間足を止めてご覧になるお客様が多くいらっしゃいました。これは元々「北海が描いた絵画作品と現地の風景を比較したら、どんな違いがあるのだろう」という関心に端を発したプロジェクトで、地質学の研究者とドローンによる空撮・編集技術を持つ方の協力により、約17分の動画にまとめられたものです。新緑の頃から紅葉の秋、そして冬の雪景色まで、高島北海が多くの人に覚えてもらいたかった長門峡の溪谷美が、空間を演出しました。



上) ワークショップのようす。中) スライドトークのようす。下) ブックレット(税込800円)

会期中、3つの関連イベントを実施しました。ワークショップ「長府の植物で作るリース」(2月6日(土)、2月28日(日))

感染症対策のため定員を絞っての開催となりましたが、2日間で10名の方が参加されました。高島北海の《花影箋》をテーマにした花壇を管理するボランティアグループ「三角花壇の会」の皆さんを講師に迎え、リース作りをしました。使う花材は、長府で採集した植物ばかりというこだわりの講座です。同じ素材でも作り手によってそれぞれに個性的なリースができました。

植物はかせ・内田さんのスライドトーク(2月11日(木・祝)、2月13日(土))

下関市園芸センターの内田祐介主任を講師に、今回の展覧会で展示している植物を描いた作品を取り上げ、解説していただきました。植物の描写から種類を特定したり、開花時期から季節を推定したりと、次々と繰り出される植物ネタに圧倒される時間となりました。

各日30名の熱心なオーディエンスを迎えて盛り上がりました。

トークイベント「高島北海と長門峡」(3月6日(土))

地質学者としての高島北海、そして画家としての北海を、長門峡をキーワードに掘り下げます。地質学の金折裕司元山口大学教授、長門峡動画撮影・編集者の永山伸一さん、岡本正康下関市立美術館副館長を講師に迎え、それぞれの専門分野からの発表とフリートークで実施されました。

昨年突如として始まった新型コロナウイルスの世界的な流行に、本展は準備の段階から大いに影響を受けることとなりました。当初の構想からダウンサイジングし、実現可能な展示構成を見極める必要がありました。開幕後も緊急事態宣言下の対応として、会期の大半で山口県内からのみに来館を制限する措置を続けざるを得ず、最終盤まで遠方からのお客様をお迎えできるかどうか不透明な状況です(3月2日以降解除)。このような中、作品の出品をご快諾くださった各所蔵館、情報提供や調査に惜しみなくご協力くださった関係者各位のお力添えなくして、本展は実現しませんでした。

今回の特別展では自然科学の側面からのアプローチに特に光を当てましたが、こうしたジャンル横断的な研究と同時に、この度は掘り下げ切れなかった高島北海という画家個人の研究もさらに進める必要がありそうです。

## 令和2年度 新収蔵作品紹介

令和3年2月24日に第60回美術資料収集審査会が開催され、寄贈10件、寄託5件、保管転換12件の計27件が新たに収蔵されました。作品の分類ごとの内訳は日本画20件、工芸4件、写真1件、資料2件です。

上記新収蔵品を含めた所蔵作品数は【表1】のとおりとなります。（令和3年3月31日時点での見込み数）

### 日本画

- 狩野晴卓《旭日双鶴図》軸装、1861年寄贈(図1)
- 狩野晴卓《月にすき図》軸装・寄贈
- 高島北海《青緑山水嶺陵之図》軸装、1912年寄贈(図2)
- 高島北海《霜柯晚香図》軸装、1928年寄贈
- 高島北海《蓬山曉色》軸装、1930年寄贈
- 亀永吾郎《梅美人図》軸装・寄贈
- 亀永吾郎《納涼美人図》軸装・寄贈
- 亀永吾郎《雛ノ図》軸装・寄贈
- 藤田隆治《野猿の図》軸装・戦前作・保管転換
- 藤田隆治《カラス》額装、1960年頃・保管転換(図3)
- 藤田隆治《野火》額装、1960年・保管転換

### 工芸

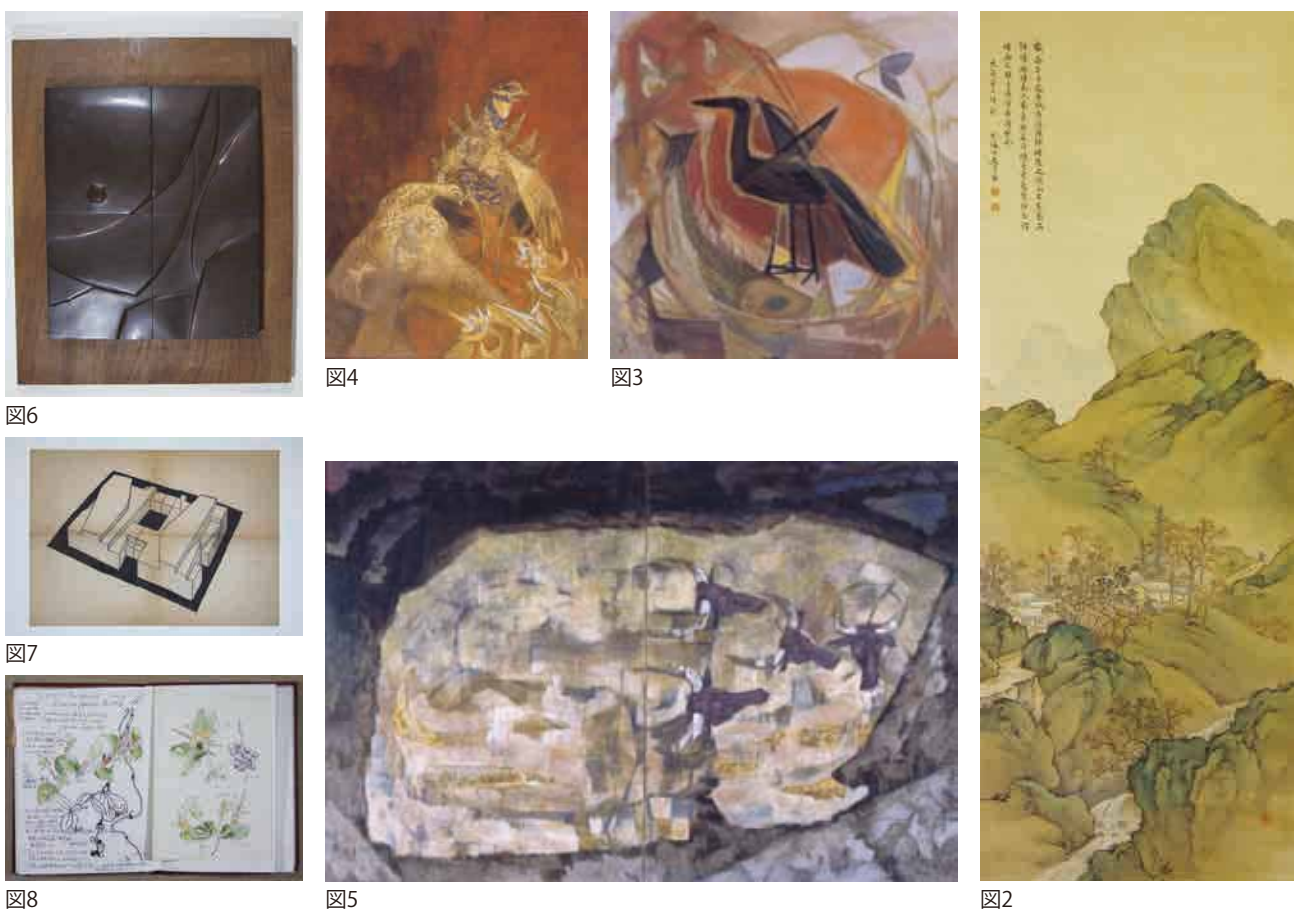
- 藤田隆治《野火》額装、1961年保管転換(図4)
- 藤田隆治《でいねいの底》額装、1961年保管転換
- 藤田隆治《海老》額装、1961年保管転換
- 藤田隆治《うしをの谷間》額装、1961年保管転換
- 藤田隆治《湿地帯》額装、1961年保管転換(図5)
- 藤田隆治《白い太陽》額装、1962年保管転換
- 藤田隆治《鯉》額装・保管転換
- 藤田隆治《七面鳥》軸装・保管転換

### 写真

- 堀尾卓司《硯板・房》硯、1974年寄託(図6)
- 堀尾卓司《斧》硯・寄託
- 堀尾卓司《さかな》硯・寄託
- 堀尾信夫《変形十字研「はやぶさ」》硯、2019年寄託

### 資料

- 吉岡一生《きょうつれづれ》パネル貼、1989-1993年寄贈
- 堀尾卓司 制作資料・寄託(図7)
- 杏橋忠次郎 関連資料・寄贈(図8)



【表1】美術資料区分別件数一覧 ※令和3年3月31日見込

分類	寄贈	寄託	購入	保管転換	計
日本画	186	62	148	25	421
洋画	175	36	151	20	382
水彩・素描	139	10	27	1	177
版画	216	3	553	0	772
彫塑	121	0	34	1	156
工芸	167	49	97	0	313
写真	18	0	6	0	24
書	3	0	0	0	3
資料	125	22	8	2	157
合計	1,150	182	1,024	49	2,405



図1

## 【修復事業実施報告】

令和2年度は「ふるさとしものせき応援基金」活用事業の一環として、所蔵作品から狩野芳崖の作品ほか日本画7点（うち1点は表具の修復のみ）及び香月泰男の作品ほかの洋画7点（うち1点は額装の修復のみ）の修復を実施しました。

### △日本画▽

- 狩野芳崖 《林和靖》
- 狩野晴卓 《春秋山水図》
- 狩野晴卓 《観月図》
- 度会洞玉 《群鶴図》
- 松林桂月 《富嶽図》 ※表具のみ
- 高島北海 《水墨山水図》
- 高島北海 《秋山夕麗》 (図9)

### △洋画▽

- 香月泰男 《自転車》
- 香月泰男 《霞草》
- 香月泰男 《柿の枝に月》
- 殿敷侃 《は1》
- 殿敷侃 《ジュバン（釈妙昭信女B）》
- 古茂田守介 《やさい》
- 藤田嗣治 《猫を抱く少女》 ※額のみ



図9(修復後)

お知らせ

開催中～5/9(日)  
所蔵品展No.154

【特集】マンガと芳崖ほか

線描、デフォルメ、キャラクター造形やストーリーなどの描写など、さまざまな角度から狩野芳崖、小田海僊らの日本画にみられる漫画的表現に注目します。

また、令和2年度にふるさとものせき応援基金を活用し修復された作品と、令和2年度の新収蔵作品のお披露目をいたします。

さらに、生誕110年となる下関ゆかりの洋画家椿義則の作品も紹介します。

ボリューム盛りだくさんの所蔵品展です。是非みなさまお越しください。



狩野芳崖《枯木猿猴図》1880-82年頃



小田海僊《漁楽図屏風》1835年 部分

■ Topics 1

このたび「潮流・下関2020」展の出品作家である中原麻貴氏が、下関市職員OB親和会55周年記念事業地域文化奨励賞を受賞されました。

中原氏の作品は下関市役所本庁舎1階の展示ケースで紹介されました。



本庁展示ケースでの展示の様子

■ Topics 2

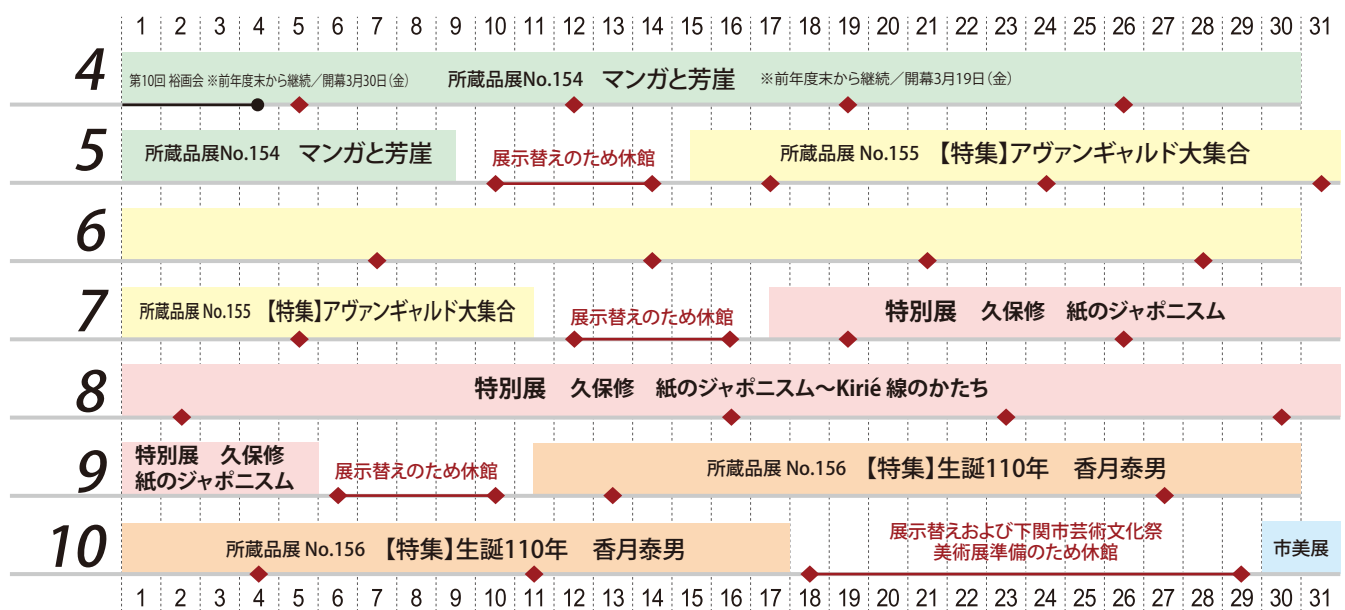
2020年夏に開催した特別展「現代美術の最前線—タグチ・アート・コレクション」の会場写真&3D映像&動画が、タグチ・アート・コレクションの公式HPにて公開されました!皆様ぜひご覧ください。

<https://taguchiartcollection.jp>

新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、美術館入館の際に、体温検知機能付き顔認証カメラによる検温、手指の消毒、氏名・連絡先の記入をお願いしております。ご協力をよろしくお願いいたします。

下関市立美術館展覧会スケジュール(2021年4月～10月)

◆ 休館日



下関市立美術館NEWS